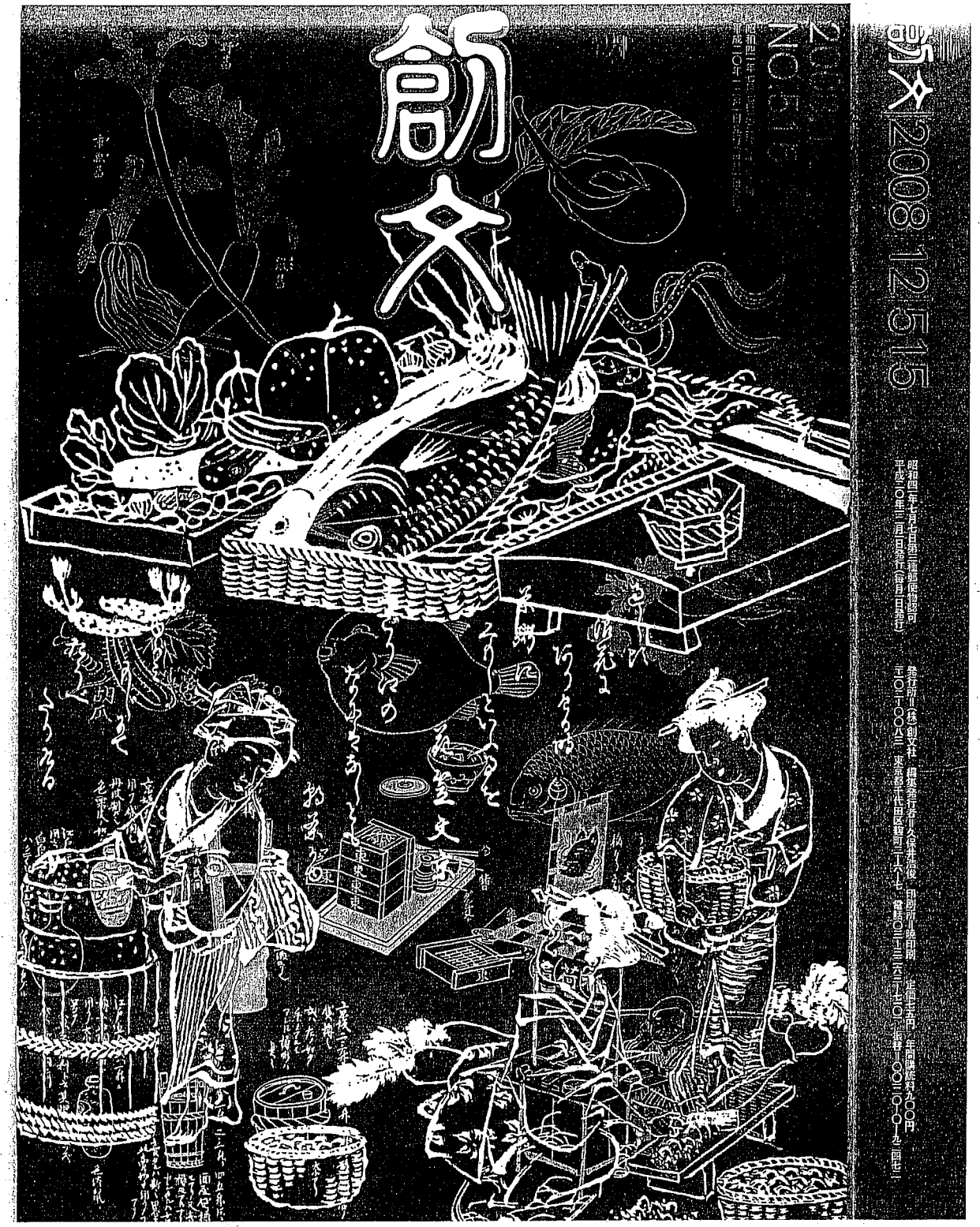

http://www.sobunsha.co.jp ISSN1343-6147

▶最近の刊行書◀ （価格表示は本体価格）

1-2月
戸田 聡
キリスト教修道制の成立 5500

山下彰一／シャヒド・ユスフ編
躍進するアジアの産業クラスターと日本の課題 3800

3月
浅見洋二
中国の詩学認識 14000

小島信泰
近世浅草寺の寺法と構造 10000

4月
法制史学会編
法制史研究 57 10000

中田光雄
正義、法－権利、脱－構築 7500

5月
ヴィノグラードフ 富沢霊岸・鈴木利章訳（名著翻訳叢書）
イギリス荘園の成立 補訂版 6500

6月
トマス・アクィナス 稲垣良典訳
神学大全 33／34 5000

7月
大木 康（中国学芸叢書）
明清文学の人びと 2800

角 忍
カント哲学と最高善 6500

8月
宮田光雄（宮田光雄思想論集別巻）
ヨーロッパ思想史の旅 8000

林信夫・新田一郎編
法が生まれるとき 5500

10月
安藤信廣（東洋学叢書）
庾信と六朝文学 10000

11月
太田知行・荒川重勝・生熊長幸編
民事法学への挑戦と新たな構築 22000

櫻井利夫
ドイツ封建社会の構造 9000

12月
大内 孝
アメリカ法制史研究序説 10000

昭和四二年七月七日第三種郵便物認可
平成二〇年二月一日発行（毎月一日発行）
発行所／㈱創文社 編集発行者／久保井治俊 印刷所／勝印刷 定価千五百円 年間購読料一八〇〇円
〒一〇一－〇〇八三 東京都千代田区神田駿河台三－一六－七 電話〇三－三二五六－五〇一〇 振替口座〇〇一〇〇－九－四七二

けられていることは、当事者に責任を負わせられない残余部分を決定づけるものとなるのだ。

こうして平等論の責任構想を、現実世界の文脈に条件づけられるものとして構成するならば、後退問題といった形而上学的問題に足をすくわれることがないだけでなく、反平等主義という批判をも回避できるということがわかる。このことを念頭に置いて、冒頭の話に戻ろう。なにより言えることは、責任をわれわれの議論のように構想化すると、新自由主義者が目論む貧困者への帰責が退けられるということだ。理由は二つある。第一に、貧困者が責任の二つの条件を充たす状況にない場合、不平等の責任は問われないからである。現実の貧困者をみれば、合理的能力に瑕疵なき欠損がみられたり、合理的能力があっても、選択肢の束の中に、いくら熟慮しても適理的だと判断しうるものがなかったりする場合が多い。格差の再生産がみられる状況では、教育へのアクセスにも格差があったりするし、就ける仕事の内容にも露骨な差が出てくる。そのような状況では、格差に喘いでいる者に責任を問えないとするのが、われわれの責任構想である。第二の理由は、仮に責任の二つの条件を充たす場合でも、われわれの責任構想では、完全には貧困者に責任を負わせることがないからである。当事者に合理的能力が備わっているとしても、それは完全なものとは言えないだろうし、選択肢の適理性は選択肢の完全性を保証するものではない。したがって、どんなに貧困者に責任があるとみられても、帰責できない残余部分が彼らの救済を約束するのである。この、新自由主義的な帰責のレトリックを否定するというところに、われわれの構想の実践的意義がみてとれよう。

（1）合理的能力が当事者に備わっていない場合でも、その欠損が当事者の瑕疵によるものかどうかは問われるべき事柄である。この点については、J・E・ローマーの議論を援用することで対処可能だ。すなわち、生まれや育ちに関わるファクターに基づいて全人口をタイプ別に分類し、タイプ毎に備わっているはずの合理的能力の水準を算出し、当該タイプに分類された当事者の合理的能力がその水準に満たない場合は、当事者に一定程度、瑕疵があるとすれば良い。

（いのうえ・あきら　東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻助教／政治哲学・倫理学）

神学者エジディオ・ダ・ヴィテルボと画家ラファエッロ

――ローマ滞在日録より――

根占　献一

四月から半年に亘る在外研究先として特にローマを選んだ。一年ではなく半期になったのは家の事情による。滞在先の詳しい情報は川村信三上智大学准教授と、留学生の小野麻由子さんから頂いていた。いくら何度もローマを訪れたことがあるとはいえ、土地勘がない者には、フィウミチーノ空港に宮崎カリタス会の修道女おふたりに迎えられ、アパルトメントまで電車（最寄り駅はノーメンターナ駅）で案内されたのは有難かった。そのおひとりは何十年もトラステェヴェレで共同生活を送るアダルベルタ松山さんで、アダルベルタさんからは早速に、住まい近くを流れるアニエネ川がテヴェレ川に注ぐと教えられた。もちろん、この川のことはそれまでまったく知らず、ありきたりの小川というふうに聞き流した。

アニエネ川とは、あとでローマ近郊のヴィッラ・グレゴリアーナ訪問時に出くわすことになる。同じくティヴォリにあるヴィッラ・デステよりもこちらのほうが心に適い、ロマン主義が初めて理解できた気がした。数多い噴水で有名なエステ荘も悪くはないが、自然のままに岩石間を縫って流れ、時に滝となっているこの川の谿声と、高低差の激しい、古代神殿のある風景は実に印象深く、場合によっては日本的心象とも映じ、望郷の念に駆られた。七月のことである。

ローマの中心部に出るにはノーメンターナ通りをバスで行き、ピア門から市内に入る。その市内はアウレリアヌス帝の城壁（二七〇年代の建設）に取り囲まれている。この門はミケランジェロの設計になり、既に見学したことがあったのだが、毎日、市内の行き帰りに眺めることになるとは思ってもみなかった。イタリア近代史に興味がある者には、この門よりイタリア王国軍が近くの壁を突破して、教皇の住むローマを制圧した一八七〇年の九月二〇日の日が想起されよう。突破跡とピア門前には記念碑が立つ。入門すると、九月二〇日通りと名を変える。この通りを真っ直ぐ進めば、クィリナーレ宮殿に至る。「長い袖」の宮殿一翼から脇の通り名はクィリナーレと再び変わる。

館はローマ教皇の住まいだったところで、今は大統領官邸である。同邸は日曜日に開放され、一度、多くのイタリア国民とともに見学した。官邸の向かいに、同名広場を挟んでバッラヴィチーニ＝ロスピリオージ宮殿がある。大統領が執務をとり、要人が訪ち邸近

接ゆえにこの宮殿入り口は少々警戒が厳しく、来訪した目的を告げなければならない。ここではグイド・レーニの傑作《アウローラ》を鑑賞するためであり、こちらのほうは二度見た。月の初日に宮殿内の一角カジノで、クアドリ・リポルターティの天井を見ることが無料で許される。レーニはこのほか、ローマ市内の聖堂で何点か見たが、私には少々甘美過ぎるキリストであり、天使であった。バロック画家とされるものの、上品な古典主義的画家に見える。後述するラファエッロ（一四八三―一五二〇）の流れを汲む正統派ではなかったのか。

教皇庁立グレゴリアーナ大学もクィリナーレ広場から程近い。同大学の菅原裕二教授にもお世話になった。ハインリヒ・プファイファー（Heinrich Pfeiffer）が同大学で聖鑠として教鞭を執り続けていることは菅原師より知らされ、是非会いたいと念願していた。また新たな著書のことも知っていたので、現地で購入したいと思っていた。旧著は『ラファエッロの《論議》図像解釈。エジディオ・ダ・ヴィテルボと「署名の間」のキリスト教的・プラトン的概念』（*Zur Ikonographie von Raffaels Disputa. Egidio da Viterbo und die christlich-platonische Konzeption der Stanza della Segnatura*, Roma 1975）で、私の大切な一書となっている。これはイタリアへ持参した。それは携えた数少ない書籍の一冊で、会う前に今一度読もうと決めていた。他にエジディオ関係書は二冊、持って行った。うち一点はジュゼッペ・シニョレッリ（Giuseppe Signorelli）の『枢機卿エジディオ・ダ・ヴィテルボ。アウグスティヌス会士・ヒューマニスト・改革者。一四六九―一五三二年』（*Il Card. Egidio da Viterbo. Agostiano, umanista e riformatore, 1469-1532*, Firenze 1929）で仮綴の古書であり、読んでいるうちにバラバラになっていた。今回のサバティカル記念に製本に出すつもりであった。[1]

このような専門書を読むに至ったのは、ルネサンスを代表するプラトン哲学者マルシリオ・フィチーノ（一四三三―九九）との関係からである。卒業論文に取り掛かっている頃に、高階秀爾『ルネッサンスの光と闇―芸術と精神風土』（三彩社、一九七一年）とエルヴィン（アーウィン）・パノフスキーの翻訳書『イコノロジー研究―ルネサンス美術における人文主義の諸テーマ』（美術出版社、同年。原書は一九三九年初版で一九七二年 First icon edition 所有）と出会い、フィチーノと新プラトン主義を知ることになった。両書とも装丁も良く、中身もそれを裏切らず、幾度も手にした。ただ残念なことに、高階著は民放のある特別番組に協力した際に、とある製作会社のプロデュサーに貸したばかりに油性ペンで数多くの頁を線引きされてしまった。愛書家には手酷い仕打ちで、頁をめくる気力が失せてしまった。三〇代半ばの時である。

閑話休題。好著は更に別の書籍に進む気を起こさせる。そのような書物の最初の一本となったのは、アンドレ・シャステル（André Chastel）の『ロレンツォ・イル・マニフィコ時代の芸術と人文主義。ルネサンスとプラトン的人文主義の研究』（*Art et Humanisme à Florence au temps de Laurent le Magnifique. Études sur la Renaissance et l'Humanisme platonicien*, Paris 1961）であった。一九七四年

早々に入手したことが、挿んだままになっている、一〇円切手貼付の、届いた旨の書店からの葉書で分かる。この本屋は今はない。この四つ折り判は若い時に読了しただけに熾烈な記憶を残すことになった。今は一九八二年に出た新版も手元にある。

同書中にフィチーノ宛のエジディオの名高い書簡（一四九〇年代初期）が引用されていた。それは、若いエジディオがプラトン哲学復興者としてのフィチーノをキリスト教神学のために天上的使命を果たしつつある、と称えていて、巫女シビュラに関心を寄せるエジディオらしい預言者的文面となっている。この書簡は現在では『フィチーノ補遺』（*Supplementum ficinianum*, auspiciis regiae scholae normalis superioris pisanae Paulus Oscarius Kristeller, Florentiae 1937［ristampa 1973］）に収録され、容易に読めるが、原本はローマのアンジェリカ図書館にある。私は今回、この図書館には特にエジディオの主著『二十の時代の歴史』（*Historia XX saeculorum*）を調査するために通った。彼の書き物は依然として刊本化されていないものが多く、研究者泣かせである。同館はサンタゴスティーノ聖堂（聖アウグスティヌス教会）右手にあり、アウグスティヌス隠修士会の長となる、雄弁な説教師エジディオはこの聖堂内に眠っている。なお、彼の故郷ヴィテルボ泊からも限りない収穫を得た。一度立ち寄っただけに過ぎず、それだけに待望の地であり、大先達を知る修道士からゆくりなくも話が聞けて、幸運であった。

さて、プファイファー師とは四月一五日に会い、長時間有意義な話を伺うことができた。その内容は多岐に亘り、旧同僚のルネサンス思想史家ジョヴァンニ・ディ・ナポリの名も出た。最後には大学図書館のある一室に特別な鍵で案内された。また抜き刷りを二点頂いた。『ラファエッロの《論議》図像解釈』は学位論文が本になったもので、師三六歳の時の作である。今は白髪で、背は私より低いものの、しゃきっとして若々しかった。この著作でルネサンス絵画が哲学思想を美的に表現したこと、またラファエッロが同図素描に作詩していたことも知り、俄然、この大画家に引かれたことを覚えている。彼は単に聖母の、また《パン屋の娘（ラ・フォルナリーナ）》の画家ではない。ローマの地での生活は一五〇八年から開始され、好学の若者はこの社会で大きく成長する。教皇ユリウス二世の書斎兼図書室である「署名の間」の、《論議》を始めとする各フレスコ画がいかなる時代思潮に影響され、誰がその画題をラファエッロに提示できたかは、近年盛んに研究成果が発表されている。

エジディオの著作を中心に《論議》を考察した教授に対して、別のヒューマニストに注目している学者もいる。この間の詳細は別稿を期したいが、師は、同じくイエズス会士で『エジディオ・ダ・ヴィテルボのローマ教会と改革―ルネサンス思想研究』（*Giles of Viterbo on Church and Reform. A Study in Renaissance Thought*, Leiden 1968）を上梓したジョン・オマリー（John O'Malley）とは解釈が近いであろう。オマリー師はミケランジェロによるシスティーナ礼拝堂の天上画と《最後の審判》のほうにより高い関心を向けてきたが、プファイファーも新刊大著『覆いを取り去ったシスティーナ。大作の図像解釈』（*La Sistina svelata. Iconografia di un*

capolavoro, Milano 2007）では、同礼拝堂フレスコ画解明に教義神学から迫っている。

システィーナ礼拝堂の名の由来となる教皇シクストゥス四世とユリウス二世はデッラ・ローヴェレ家出身の一族で、ともにフランチェスコ修道会の出であった。またシクストゥスには神学者としての著述もある。ブラマンテに託されたサン・ピエトロ大聖堂改築そのものも、新たな歴史的視点で考究されなくてはならない、と主張している点ではこの両専門家は同じ立場にある。ローマ教会刷新の動向は、古代文化復興としてのルネサンスとヨーロッパの地理的拡大の、即ち地理上の発見の時と重なり、新時代到来の気運は弥が上に高まった。そのような中、時代の区切りとなる一五〇〇年とその前後には予言が飛び交い、人心が沸き立った。サンタゴスティーノ聖堂にはやはりラファエッロの手になる預言者〈イザヤ〉があり、あの時代の息吹を今に伝えている。またサンタ・マリア・デッラ・パーチェ聖堂も遠くはなく、ここにも彼の〈巫女と天使〉を見ることができる。画家は時代の寵児、時代精神の具現者でもある。

紙幅もわずかとなった。実は滞伊中もっとも通った場所は、大聖堂間近のイエズス会歴史研究文書館（ビブリオテカ・イスティトゥト・ストリコ）であった。ここは宝の山で研究者冥利に尽きる。アントニオ・ポッセヴィーノの稀覯本『蔵書精選』（*Bibliotheca selecta*. 初版一五九三年ローマ）がすぐに読めた。また拡大する西欧が向かった先の古日本の関係書に魅了された。篤学のキリシタン学者ヨーゼフ・フランツ・シュッテ（一九〇六―八一）の業績はその中でも堅実そのものである。晩年の労作（一九七五年）は文書解説等がラテン語仕立てである。師は日本に永住して研究を行う気持ちが強くあったが、史料がこちらに多いために断念したという。普段日本にいるヨーロッパ研究者には耳の痛い話である。

還暦を控えた私は歳月が疾く過ぎ去ったと思い知らされながらも、出会った若い人たちに聊かの自負と大いなる希望を持った。特に三人、ひとりの外国人、ふたりの日本人が思い出される。彼らのうちふたりは合衆国とフランスの各大学院で博士号修得を目指し、もうひとりはこの秋からシエナ大学からピサのスクオーラ・ノルマーレ・スペリオーレへの進学が決まっていた。前途洋々たる彼らに武運ならぬ文運を祈ることはこの年代に達した者の務めであろう。

（1）夏はフィレンツェに滞在した。裝丁（一部革）によりこの書は甦った。他の一冊は、Francis X. Martin, O. S. A., *Friar, Reformer, and Renaissance Scholar. Life and Works of Giles of Viterbo 1469-1532*, Villanova 1992. これも優れた研究書。

（ねじめ・けんいち　学習院女子大学国際文化交流学部教授／ルネサンス思想・文化史）

◆根占献一著『フィレンツェ共和国のヒューマニスト　―イタリア・ルネサンス研究』（六五〇〇円）
◆根占献一著『共和国のプラトン的世界　―イタリア・ルネサンス研究・続』（五三〇〇円）

主体変容

――現実受容の装置としての夢と物語――

村上靖彦

人は誰でも多かれ少なかれ悩みを抱えている。場合によっては、不安や恐怖、抑鬱に押しつぶされ、精神疾患に陥り、自ら命をたちかねない。と同時に、人間には状況を克服し回復する力も備わっている。傷つきやすさと回復の力は、ともに主体の構造に組み込まれているのであろう。あるいは主体とは、傷つくことと回復、すなわち変容の可能性そのもののことだと言っても良い。

ここでは人間が投げ込まれている状況のうち、特に受け入れがたい状況、私たちを押しつぶしかねない状況のことを「現実」と名付ける。主体の変容は、常に現実の触発と相関する。病に陥る場合も、逆に治癒あるいは行為によって克服する場合でも、現実との相関が問題になる。この小文では、肯定的な主体変容をあらかじめ描く装置として呈示し、沈黙そして夢・物語を、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を一例として論じる。(1)

夢と物語は一方で、現実触発からの位相的距離をつくる装置として主体変容のプロセス内の一要素である。他方で主体変容のプロセス全体を映し出し登記するというメタな位置にも立つ。『銀河鉄道の夜』の場合はさらに、夢を物語の筋の中に組み込むという重層構造を持つ。それゆえ現実受容のプロセスも、まずジョバンニの夢のなか、次に物語全体（目覚めたジョバンニの経験）、三つ目に物語を読む読者、と三重の水準で作動する。

1　沈黙――現実の聴取

ここでは、夢や物語が現実触発からの位相的距離を作る仕組みはわきにおき、主体変容のプロセスを素描する仕組みを見てゆく。具体的には、物語のなかに、沈黙（現実の聴取）・物語（現実の反転）・主体変容（現実への介入）という三段階の現実受容のプロセ